

平成15年度

独立行政法人国立美術館  
東京国立近代美術館フィルムセンター

事業報告書

# 目 次

フィルムセンターの概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	6
1. 収集保管	6
(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況	6
(2) 保管の状況	8
(3) 修理の状況	10
2. 公衆への観覧	12
(1) 展覧会・企画上映の状況	12
「逝ける映画人を偲んで 1998 - 2001(2)」(企画上映)	14
「発掘された映画たち2003」(企画上映)	15
「映画監督 市川崑」(企画上映)	16
「シリーズ・日本の撮影監督(1)」(企画上映)	17
「短篇映像メディアに見る現代日本」(共催上映)	18
「日本におけるトルコ年記念事業 トルコ映画の現在」(共催上映)	19
「聖なる映画作家, カール・ドライヤー」(共催上映)	20
「小津安二郎生誕100年記念 小津安二郎の藝術」(共催上映)	21
「特集上映 清水宏 生誕100年」(共催上映)	22
「展覧会 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展(所蔵品展)	24
「映画資料でみる蒲田時代の小津安二郎と清水宏」展(所蔵品展)	26
(併設: 展覧会 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより)展	
「優秀映画鑑賞推進事業」	27
(2) 貸与・特別観覧の状況	29
3. 調査研究	31
4. 教育普及	33
(1) - 1 資料の収集及び公開(観覧)の状況	36
(1) - 2 広報活動の状況	37
(1) - 3 デジタル化の状況	38
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	39
(2) - 2 講演会等の事業	40
(3) - 1 研修の取組	41
(3) - 2 大学等との連携	42
(3) - 3 ボランティアの活用状況	43
(4) 渉外活動	44
5. その他の入館者サービス	45

## フィルムセンターの概要

### 1. 目的

フィルムセンターは、昭和27年の近代美術館開館当初にフィルム・ライブラリーとして発足した。その文化的、芸術的、歴史的価値に鑑みて、映画についても美術館の対象領域と位置付けられたものである。

フィルムセンターは、同種の施設が皆無であることもあり、映画に関する総合的な歴史博物館として映画フィルムや映画の関連資料を可能なかぎり網羅的に収集、保管、公開し、わが国の映画文化全般にわたって中枢的な研究・普及機関としての役割を担っている。

発足した当時は、美術展に関連した美術映画を週1、2回程度上映するとともに主に劇映画フィルムの収集を行っていた。昭和37年にフランスとの交換映画祭を開催したことを契機に、以後諸外国との交換映画祭が活発に開催されるようになり、上映活動も1日1回程度に拡充された。また、同時に諸外国で開催される映画祭での日本映画上映のためにフィルム収集が活発に行われるようになった。

その後、昭和42年から3年間、戦後GHQに接收された可燃性の日本映画の返還が行われ、これの不燃化作業が実施されることで、所蔵映画フィルムの充実が図られた。昭和44年の美術館の移転に伴い、昭和45年にはフィルム・ライブラリー業務の拡充と上映施設及び映画に関する展示室が整備されてフィルムセンターとして開館した。昭和61年に映画フィルム専用の保存施設が神奈川県相模原市に設置された。平成7年には旧施設の全面改築によって施設規模も拡充し、収集・保存・上映事業も充実して、今日に至っている。

### 2. 土地・建物

#### (1) フィルムセンター

建面積	727m <sup>2</sup>
延べ面積	6,912m <sup>2</sup>
展示面積	343m <sup>2</sup>
収蔵庫面積	341m <sup>2</sup>

#### (2) フィルムセンター相模原分館

建面積	1,311m <sup>2</sup>
延べ面積	4,344m <sup>2</sup>
保存庫面積	2,022m <sup>2</sup>

3. 定員 11人

4. 予算 640,524,367円

## 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充當して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
  - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
  - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
  - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
  - (4) 外部委託の推進
  - (5) 事務のOA化の推進
  - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
  - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

### 実績

1. 業務の一元化  
本部において、これまで行っている一元化に加え、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等(リサイクル)
  - (1) 光熱水量  
フィルムセンター  
光熱水量(料)の節約・効率化の推進を行っているが、平成15年1月からフィルムセンター内に国立新美術館の設立準備室が設置されたが、昨年に引き続き基本料金の削減により、節約を図った。  
ア. 電気 使用量 937,178kwh(平成14年度比 101.40%) 料金 20,352,535円(平成14年度比 101.53%)  
イ. 水道 使用量 3,504m<sup>3</sup> (平成14年度比 107.00%) 料金 2,053,293円(平成14年度比 106.88%)  
相模原分館  
前年度に引き続き適用料金が低廉な電力供給契約への見直しにより、電気料金の低減を図ったが、寄贈作品や寄託作品の受入のための作業等により、電気量が増加した。  
ア. 電気 使用量 1,072,286kwh(平成14年度比 111.39%) 料金 14,883,162円(平成14年度比 109.69%)  
イ. 水道 使用量 96m<sup>3</sup> (平成14年度比 69.06%) 料金 17,343円 (平成14年度比 65.72%)
  - (2) 廃棄物処理量  
一般廃棄物量が増加した要因は、国立新美術館設立準備室が設置されたことによる。  
また、産業廃棄物量が増加した要因は、新たにフィルム缶の廃棄処理を行ったことによる。  
フィルムセンター  
ア. 一般廃棄物 11,720Kg(平成14年度比 285.16%) 料金 214,009円(平成14年度比 143.33%)  
イ. 産業廃棄物 12,850Kg(平成14年度比 318.86%) 料金 344,448円(平成14年度比 53.91%)  
相模原分館  
ア. 一般廃棄物 - Kg(平成14年度比 - %) 料金 - 円(平成14年度比 - %)  
イ. 産業廃棄物 3,614Kg(平成14年度比 - %) 料金 310,432円(平成14年度比 - %)
  - (3) その他 古紙の再利用、OA機器用のトナーカートリッジのリサイクルによる再生使用。
3. 施設の有効利用  
小ホールの利用率 21.37% (78日/365日)  
相模原分館映写ホールの利用率 1.64%(6日/365日)
4. 外部委託
  - 1 清掃業務
  - 2 機械設備等維持及び運転管理業務
  - 3 受付、出札、警備等の会場管理業務
  - 4 大ホールの映写業務
  - 5 夜間及び休館日の機械警備業務
  - 6 その他、設備関係のメンテナンス業務
5. OA化  
館内LANの整備状況  
フィルムセンター事務室、映写室、図書室、収蔵庫等の館内LAN及び相模原分館とのISDN回線を利用した通信が整備さ

れており、職員へパソコンを各1台配置し、館内、相模原分館及び本館等に電子メールによる事務連絡等を行った。

・紙の使用量 A4判 307,500枚(平成14年度比189.23%)  
A3判 15,000枚(平成14年度比 75.00%)  
B4判 15,000枚(平成14年度比 85.71%)  
B5判 2,500枚(平成14年度比 50.00%)

#### 6. 一般競争入札

映画フィルムの購入契約は、著作権者との契約による購入となるため、競争入札では入手できない。  
そのほかは東京国立近代美術館に含まれる。

#### 7. 評議員会, 外部評価委員会

##### (1) 評議員会

開催回数 2回

議事内容

第1回:平成15年5月28日(水)

平成14年度事業報告及び平成15年度事業計画並びに文化庁で行われた「映画振興に関する懇談会」の提言についての報告、意見交換

第2回:平成16年2月25日(水)

平成16年度の事業計画について協議

#### 8. その他

##### (1) 施設の有効利用の推進

7階展示ホールを「映画の広場」として開放。

会議室及び小ホールを映画に関する行事に貸付。

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

光熱水量等数値的には増減があるが全般的に年度計画に沿った効率化を達成できた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

小ホールの使用の活性化を視野に入れ、試験的に短期間ではあるが共催上映を2企画実施した結果、事業としては良い評価を受けることができたが、夏季に実施した上映の場合に契約電力量を超えることが度々起こり、今後は、両会場を同時期に使用する場合には、夏季及び冬季は極力避ける必要がある。

また、相模原分館ホールについては、これまで地元相模原市との共催により市制記念日に合わせ、「さがみ風っ子映画祭・親子映画鑑賞会」を実施してきたが、相模原市側の事情により当該事業の継続が困難となった。今後は本事業に替わる事業を検討し、ホール使用の活性化を目指す必要があるが、相模原分館ホールについては、限られた人員での運営であることから、積極的な活用を行うためには、外部との連携による活用に頼らざるを得ず、今後とも継続して検討を重ねる必要があると考える。

#### 【計画を達成するため障害となっている点】

電力の需給契約の見直しを図ることで、基本料金の減額を行うことが可能であるが、平成15年度から施設内に「国立新美術館設立準備室」を設置したことにより、当施設における全体の必要電力量が見込めないため、当分の間契約電力量の見直しをすることができない。また、平成14年度の実績報告においても記述したが、入場者数や、季節の寒暖によって、光熱水量が増減することとなり、年間使用量を正確に把握することは困難である。

## 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために とるべき措置

### 1. 収集・保管

#### (1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

##### 中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

##### (東京国立近代美術館)

近・現代の絵画・水彩・素描・版画・彫刻・写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。

美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。

また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。

(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

##### 実績

1. 購入	281本
2. 寄贈	1,663本
3. 寄託	2,375本
4. 陳列品購入費	予算額 125,244,000円 決算額 118,601,516円

##### 自己点検評価

###### 【良かった点、特色ある取組み】

映画フィルムの収集状況は、平成15年度末現在、日本映画29,203本、外国映画7,305本である。これらの映画は、劇文化・記録・ニュース・アニメーション・テレビといった分野別に整理している。いずれの分野も全製作本数自体の正確な数が不明であるため、その収集率を示すことはできないが、日本劇映画を例にとると、これまでの製作本数を戦前13,000作品、戦後15,000作品とした場合のフィルムセンターの収集率は全体で14%程度と推定される。

収集率の向上は極めて重要な課題ではあるが、限られた予算の範囲で収集を行うことから、散逸又は劣化が懸念されるものの購入や不燃化を優先的に行いながら、映画芸術的に優れた作品、映画史的に重要な作品及びフィルムセンターの事業を実施する上で必要な作品等を収集するという基本的方針に基づいて収集を行っている。

なお、映画フィルムの入手先については、著作権保護期間内の作品については、管理がしっかりされており、上映や複製等の権利も、全て著作権者に帰属することから、著作権者である製作会社等から入手することが殆どである。著作権保護期間が満了しているものについては、製作年が古い関係からかなりの作品が散逸しており、この場合は個人コレクター等から収集することが多い。

平成15年度は、「映画監督 市川崑」をはじめとする企画上映及び収蔵作品の充実のため、日本映画各社の劇映画を中心とした作品を購入するとともに、NPO 法人東京フィルメックスと共同主催した「第4回東京フィルメックス」の特集上映に伴い、清水宏監督の2作品を英語字幕版プリントで購入した。平成16年度に開催予定の企画上映「日本アニメーション映画史」に向けて、アニメーション映画の購入も行った。また、平成8年及び平成10年に調査・確認されたロシア所在の戦前日本劇映画及び文化・記録映画の購入も、前年に引き続き行った。

映画フィルムの寄贈に関しては、財団法人川喜多記念映画文化財団から、6月と8月の二度にわたり外国劇映画、文化・記録映画を中心に、『冬の宿』など歴史上貴重な作品である日本劇映画を含む385作品、614本という大量の寄贈を受けた。日本文化・記録映画では、明治末期の企業家の葬儀や大正12年の関東大震災の記録など、資料的価値の高い作品を個人コレクター等から寄贈を受けた。また、平成14年度に引き続き、FIAP 会員のジョージ・イーストマン・ハウスとの交換寄贈を行うとともに、ワーナー・ブラザーズ社から、外国劇映画を主に213作品の大量の永久貸与を受けた。

社団法人映像文化製作者連盟を通じた呼びかけに応じて平成13年度から始まった、戦後製作された日本文化・記録映画などの原版フィルムの寄贈は、平成14年度に引き続き大量(9社から原版類344作品/731本、併せて2社からポジフィルム350作品/354本)の寄贈を受けた。日本文化・記録映画の散逸を防ぎ、映像文化・映像資料として将来の活用にも備えることを目指して始まったこの事業を、今後とも着実に進展させていきたい。

映画フィルムの寄託については、角川大映映画から平成15年5月に2,375作品/12,711缶の原版フィルムの寄託を受けた。

映画関係資料についてもフィルムセンターの認知が高まるのに伴い寄贈資料の数量は大型化の傾向をたどっている。近年寄贈された大型コレクションとして、春美栄光堂のコレクション(戦前から続いた著名なプロマイド屋が用いたガラス乾板一式)、みそのコレクション(コレクターである御園京平氏が収集した旧蔵図書、映画館プログラム、スチル写真一式)、反町コレクション(衣笠貞之助及び大映関係資料一式)の整理作業を進めている。とりわけ平成15年度は(株)角川大映映画からスチル写真のガラス乾板(約1,500作品分)の寄贈を受け入れることが決まり、調査のため物品の搬入を完了した。メジャーの映画会社から資料の一括寄贈が行われたのは平成12年度の東映(株)に続き2度目である。また、社屋の移転を行った(株)日本映画新社からは多数の撮影機材が寄せられており、今後の整理を行っていく必要がある。

#### 【見直し又は改善を要する点】

平成15年度に受け入れた映画フィルムの数は、平成14年度に引き続き膨大なものとなり、フィルムの調査や効率的な収納を行うためのフィルムをつなぎ替え等の仕様変更及びその作業のためのフィルム編集機等の機材と要員の確保が急務となっている。

また、映画関係資料に関しても、寄贈等による資料の増加が著しいが、これらの整理・登録の業務は、情報・資料係が行っている。同系の業務範囲は図書室や展示室の運営からフィルムセンター全体の情報システムの管理など広範囲にわたっている。図書室と映画関連資料の整理・登録については、研究官の指導の下、非常勤職員により対応してきたが、業務量の増加に伴い、これらのスタッフとの打ち合わせの時間の確保が困難な状況となっている。

特に寄贈が増加している映画関連資料の内容は、スチル写真から書簡、映画機材まであらゆるタイプのものを含んでおり、それらの一つ一つに対し専門性に裏付けられた慎重な取り扱いが求められる。今後の史資料としての映画関係資料を活用するためには、専門的知識を有する人材の確保を含む、同系を中心とした体制の充実が必要と考える。

#### 【計画を達成するために障害となっている点】

ここ数年の大量寄贈、寄託などにより、平成15年度末までに保存庫の収納率はすでに60%を超えており、保存庫の増築について本格的に検討していく必要がある。また、大手製作会社による日本劇映画フィルムの所在確認と収集は、フィルムの寄託の進展とともに、今後とも継続していくことが重要である。一方、独立系製作会社のフィルムについては、その所在確認が難しいため、これを計画的に行うことが急務となっている。また、製作者以外が所有している映画フィルムについては、新たな発見を積極的に実施していくために、国内での情報ネットワークの構築が必要である。

#### \* 添付資料

収集した美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.1)

寄贈・購入美術作品の一覧(事業実績統計表 p.24)

## (2) 保管の状況

### 中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

### 実績

#### 1. 温湿度

##### (1) フィルムセンター

###### 観覧会場

空調実施時間 9:30 ~ 18:00

温度 22 ± 2 (ただし、夏季は24 ± 2) 湿度 50% ± 5%

\* 原則として設定された温・湿度で管理を行っているが、外気温度との差により入館者のために最高25 までを許容温度としている。

\* 24時間空調が望ましいが、経費等を考慮して入館時間のみの運転時間としている。

###### 収蔵庫

空調実施時間 10:00 ~ 20:00 (ただし、土・日・月曜日は10:00 ~ 18:00)

温度 23 ± 2 湿度 55% ± 5%

\* 設備管理要員がいる間のみの運転としているが、地下3階に位置し、収蔵庫に出入りがない場合は、殆ど温・湿度に変化が生じない。

##### (2) 相模原分館

###### 収蔵庫

空調実施時間 24時間

(地下1階保存庫) 温度 10 ± 2 湿度 40% ± 5%

(地下2階保存庫) 温度 5 ± 2 湿度 40% ± 5%

(特別保存庫) 温度 2 ± 2 湿度 35% ± 5%

#### 2. 照明

フィルムセンター7階展示室内のポスター、スチル写真等は100ルクスを上限とするとともに入館者の有無を自動的に感知して照明の起動が行われるように設定し、作品への影響の低減化及び省エネルギー化を行っている。

#### 3. 空気汚染

空調熱源に関しては、全て電気で賅っているため、施設設備からの空気汚染は発生していない。

#### 4. 防災

(1) フィルムセンター収蔵庫の消火設備は二酸化炭素消火設備を設置

(2) 相模原分館保存庫の消火設備はハロゲンガス消火設備を設置

#### 5. 防犯

(1) フィルムセンターは、各階毎の機械警備(昼夜)の導入により、防犯を実施。

(2) 相模原分館は、各棟毎に機械警備(昼夜)の導入により、防犯を実施。

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

映画フィルムは化学的に脆弱なため、専用の保存庫を備えるフィルムセンター相模原分館において24時間、恒温恒湿の状態での保存している。具体的には、寄託映画フィルムを中心とした地下1階は室温10 ± 2、相対湿度40% ± 5%に設定し、原版フィルムを含む所蔵映画フィルムの収納庫がある地下2階は室温5 ± 2、湿度40% ± 5%に設定して保存している。また、アセート・ベースのフィルムに顕著な劣化現象である「ビネガー・シンドローム」に冒されたフィルムについては、独立の空調設備を備え、室温2 ± 2、湿度35% ± 5%に設定された専用室において保存しているため、フィルム素材の所蔵品については、問題ないと考えている。

また、相模原分館からのフィルムの出入庫に関しては、外気温度との格差による結露等を防止するため、ならし室で2~4日程度(季節により所要日数が変化する。)調整したうえで搬出している。フィルムセンターと相模原分館との間のフィルム運送については、保存庫と同様に1缶ずつ収納できる棚を設けたキャスター付の台車(1台あたり2,000フィート缶40缶収納)を、美術品専用



車両で運搬している。

映画関係資料については、平成15年度にスチル写真用のガラス乾板を整理・保存するため、相模原分館のフィルム保存庫内に専用の保管スペースを確保し、収納した。

【見直し又は改善を要する点】

平成15年度末に、ここ数年の寄贈フィルムの収納場所確保のため、保存庫内のフィルムの大幅な移動を行わざるを得なくなった。映画フィルムの保存については万全を期しているが、素材が科学的に脆弱なフィルムは、10年から20年に1度の保存調査が望ましいとされている。昭和62年の収蔵開始以来、17年を経過していることもあり、今回の移動を期に、収蔵フィルムの遡及的な保存調査に着手したが、その後も新規に収蔵する映画フィルムが大量に増加しており、十分な調査が行い難い状況が続いている。今後、この点に関しても体制整備を行っていく必要がある。

映画関係資料の大部分は、フィルムセンターにある温湿度の管理された専用の収蔵庫内で管理されているが、新規収蔵資料の増加が著しいため、今後はスペースの確保が問題となることが予想される。とりわけ撮影機や映写機などの映画機材類は、相模原分館内の空きスペースに保管しているのが現状で、その長期的保存のためには、専用のスペースを確保することが急務である。

### (3) 修理の状況

#### 中期計画

(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。

伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

#### 実績

1. 映画フィルム洗浄	120作品(所要経費:2,765,640円)
映画フィルムデジタル復元	2作品(所要経費:6,701,875円)
2. 修理の記録	
洗浄を実施した映画フィルムに関しては、所蔵作品データベース上へ記録を行っている。	
3. 修理費 予算額	17,251,000円 決算額 9,467,515円

#### 自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある取組み】

フィルムセンターにおいて「収蔵品の修復」とは、映画フィルムの「修復・復元」を意味する。これは、1本しか所蔵していないプリント、もしくは状態の不安定なプリントからネガ、マスター等の保存用フィルムを作成し、そこから上映用プリントを複製するものであり、現像会社の技術者との緊密な協力の下に、フィルムの化学的な側面と映画作品の内容的な側面を精査しつつ行っている。

平成15年度は、前年度に財団法人川喜多記念映画文化財団から寄贈を受けた可燃性フィルムの中から、日本劇映画『冬の宿』、『女学生記』など重要な作品について不燃化作業(不燃性フィルムへの複製)を行ったほか、個人製作者やコレクターなどから提供を受けていた可燃性フィルムについても同様に作業を行った。米国からの返還映画などで保存用ネガがあるものの、上映用プリントが未作成であった作品については、35mmの上映用プリントを複製した。また、京都府や篠山市などの地方公共団体や一般企業が所蔵する原版フィルムを借用して、保存用のプリントを複製した。

フィルムの洗浄作業は、既に所蔵している上映用プリントを対象として、上映を行う際に合わせて行ったほか、過去に大量寄贈されたフィルムの一部についても同様に作業を行い、平成15年度は120作品の洗浄を行った。

また、平成15年度から「映画フィルムデジタルアーカイブ化推進事業」として新たな予算措置が講じられたことを受けて、二つの事業を本格的に開始した。まず一つ目は、所蔵フィルムのデジタル方式による磁気媒体への複製である。これは主に文化・記録映画、ニュース映画をデジタル方式によりデジタルベータカムテープ(デジタル原版)に複製することにより、VHS・DVDへの変換やテレビ放送への活用等、外部からのアクセスに幅広く対応しようとするものである。平成15年度は177本の旧文部省製作・企画作品をはじめとして、196作品についてデジタル原版を作成したが、これらの中から25本のアニメーション作品については、綿密な権利処理を行った上で社団法人映像文化製作者連盟、株式会社紀伊国屋書店の企画によるDVDシリーズ「日本アートアニメーション映画選集」に提供し、広く公衆への普及に貢献することができた。二つ目は、所蔵フィルムのデジタル復元である。平成15年度は前年度の9.5mmフィルム、『斬人斬馬剣』を35mmフィルムへデジタル復元した実績を活かし、同じ9.5mmフィルム、『和製喧嘩友達』の復元を行った。これは松竹株式会社との共催による企画上映「小津安二郎の藝術」での使用を想定したもので、同社と共同復元の形を取ることができた。具体的な作業の過程では、海外の映画復元専門業者との間で培った協力関係を継続しつつも、国内の業者にも作業の一部を依頼し、今後の国内におけるデジタル復元作業に必要な技術の向上に役立たせることができた。この経験を受けて、復元済の『斬人斬馬剣』についても、特に鑑賞の妨げになっていた大きなキズを除去する試みを国内業者に依頼し、新たな技術研究を行った。

##### 【見直し又は改善を要する点】

収蔵している映画フィルムの洗浄(クリーニング)については、「保管の状況」の「自己点検評価」に掲げたとおり、遡及的なフィルムの保存調査が殆ど行えない状況であるため、収蔵フィルム全てに対しての速やかな実施は困難である。

また、経費的な面からは洗浄する映画フィルムの本数に限りがあるため、今後とも計画的に実施していく方法を検討する必要がある。

デジタル技術を活用した修復・復元技術については、まだ実験的な点が多く、今後とも調査検討を重ねる必要があるが、併せてデジタル媒体での保存についても調査することが重要と考える。

【計画を達成するために障害となっている点】

所蔵フィルムのデジタル媒体への複製は、著作権保護期間が満了しているもの（映画の場合公表後50年とされていたが、2004年1月1日から公表後70年に延長されることとなった）を中心に事業を継続してゆくことになるが、わが国の映画界では「パブリック・ドメイン」という認識が必ずしも成熟していないため、DVD等によって積極的な普及を図るにあたっては、現在の権利関係を綿密に追跡調査した上で、旧著作権者との合意を慎重に形成する必要がある。そうした権利問題を専門的に調査する人員を確保できない現在の状況は、早急な公開を求められる中で大きな障害となっている。

\* 添付資料

修理した美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.3)

修理した美術作品の一覧(事業実績統計表 p.91)

## 2. 公衆への観覧

### (1) 展覧会・企画上映等の状況

<p><b>中期計画</b></p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。</p> <p><b>(東京国立近代美術館)</b></p> <p>フィルムセンター 年5～6番組程度</p> <p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。</p> <p>なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。</p> <p>(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>
---

### 実績(総括表)

<p>1. 企画上映等 9番組(中期計画記載回数:年5～6番組)</p> <p>(企画上映)</p> <p>「逝ける映画人を偲んで 1998 - 2001(2)」</p> <p>「発掘された映画たち2003」</p> <p>「映画監督 市川崑」</p> <p>「シリーズ・日本の撮影監督(1)」</p> <p>(共催上映)</p> <p>「短篇映像メディアに見る現代日本」</p> <p>「日本におけるトルコ年記念事業 トルコ映画の現在」</p> <p>「聖なる映画作家、カール・ドライヤー」</p> <p>「小津安二郎生誕100年記念 小津安二郎の藝術」</p> <p>「特集上映 清水宏 生誕100年」</p>
<p>2. 展覧会</p> <p>「展覧会 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展</p> <p>「映画資料で見る蒲田時代の小津安二郎と清水宏」展</p> <p>(併設:展覧会 映画遺産 - 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより)展</p>
<p>3. 入館者数</p> <p>企画上映等 100,010人(目標入場者数 81,500人)</p> <p>(平成14年度実績/入場者数:78,568人,上映日数:285日,上映回数:561回)</p> <p>目標入場者数は、過去に行った同種企画上映の1回あたりの平均入場者数を参考として開催回数を乗じて算出している。</p> <p>展覧会(「映画遺産」展) 5,305人(目標入場者数 5,000人)</p>

展覧会(「映画資料で見る蒲田時代の小津安二郎と清水宏」展,併設「映画遺産」展) 5,494人  
(目標入場者数 3,000人)

目標入場者数は、過去に行った同種展覧会の1日あたりの平均入場者数を参考として開催日数を乗じて算出している。

4. 優秀映画鑑賞推進事業

176会場(目標会場数130会場以上)

5. 上映会開催経費 予算額 30,074,000円 決算額 56,632,916円

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

フィルムセンターは、その収集・保存事業とともに定期的な映画の上映を行うことを大きな特長としている。平成15年度も昨年度に引き続き、日本の文化・記録映画、トルコ映画の近作、デンマークの無声映画など、日本映画と外国映画、無声映画と戦後映画を組み合わせ、いわゆる“古今東西”のバランスをよく勘案した多彩な上映番組を企画・開催し、バラエティ豊かな作品群の上映を通して観覧者の好評を博した。平成15年度は、古今東西の映画作品を近年で、最もバランスよく上映することができたと考えられる。

平成15年度の企画として特徴的なものは、「映画監督 市川崑」と「聖なる映画作家,カール・ドライヤー」の開催によって、優れた映画作家の活動を広く紹介することができた点である。現役であり、様々な作品を監督している市川崑監督を特集した今回の上映会は、国内外を通じてもっとも多くの作品(66作品)を上映し、ドライヤー特集では同監督の全作上映をわが国ではじめて実現した。この結果、両企画とも目標入場者数の1.5倍という観客数を得ることができた。

企画内容の充実と並んで、重要と考える点は、企画に当たって、多くの外部団体と共催したことである。これまでの新聞社との共催に加え、映画業界団体、文化振興団体、国内の著名な映画祭、映画製作会社・著作権者等と共同で事業を開催したことは、今後の事業の実施における協力関係を拓くものとなった。

また、これまで自主企画では経費的に困難であった1日3回上映を、共催上映である「短篇映像メディアに見る現代日本」、「小津安二郎生誕100年記念 小津安二郎の藝術」、「特集上映 清水宏 生誕100年」の3企画で試行的に実施したことは、今後の上映計画の立案に当たって上映計画の選択肢の幅を広げることになり、有意義な試みとなった。

一方、展示においては、上映と関連して「蒲田時代の小津安二郎と清水宏」展を行ったことや、江戸開府400年記念事業へ参加したことにより、入場目標者数を大幅に上回ることができた。

【見直し又は改善を要する点】

入場者数の点では、企画上映等の総観覧者数は目標入場者数に達したが、個々の企画で見ると目標入場者数に達しなかったものもあった。特に近年発見・復元された作品による企画である「発掘された映画たち2003」では、これまで1作品につき2回上映していたものを、3回上映するという新たな試みを行ったが、個々の作品は知名度が低いものが多かったため、当初の目標入場者数に達しなかった。今後は、一律に上映回数を決定するのではなく、作品の知名度等を考慮して上映回数を検討する必要があると考える。また、「小津安二郎の藝術」では、他の生誕100記念事業として同時期にNHK - BSにおいて放映されるなどの要因により、僅かながら目標入場者数に届かなかった。今後の共催上映において著作権者と共催を行う場合には、上映予定作品の放映を時間をあけて実施してもらえるような申し入れを検討する必要がある。

\* 添付資料

入館者数の推移 (事業実績統計表 p.4 )

入場料収入の推移(事業実績統計表 p.7)

## 企画上映「逝ける映画人を偲んで 1998 - 2001(2)」

### 方 針

日本映画界にそれぞれの足跡を残し逝去した映画関係者の業績を代表作品で偲び、回顧する恒例企画である。今回は1998年1月1日から2001年12月31日までの期間に亡くなった監督、俳優、技術スタッフなどを対象とした。4年半ぶりの開催となったため、市川右太衛門、高田浩吉、新珠三千代、吉村公三郎、宮川一夫の各氏をはじめ、90名以上の映画人を94作品・86番組で追悼する大型企画であり、平成14年度に実施した企画の第2部として36作品を上映した。

### 実 績

1.開催期間	平成15年4月8日～平成15年5月18日(36日間/72回)
2.会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3.共催等	なし
4.上映作品数	36作品(1作品2回上映):延72回上映
5.入館者数	13,649人(目標入場者数 13,000人)
6.入場料金	一般500円,高校・大学生300円,小・中学生100円
7.入場料収入	5,465,800円(目標入場料収入 5,079,780円)
8.担当した研究員数	6人
9.講演会等	なし
10.広報	・印刷物(NFCカレンダー35,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ
11.上映会関連新聞・雑誌記事等	THE JAPAN TIMES(平成15年4月4日),東京新聞(平成15年4月8日:夕刊),赤旗(平成15年4月18日)
12.アンケート調査	調査期間 平成15年5月13日～平成15年5月18日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収 アンケート回収数 39件 アンケート結果 ・良い79.4%(31件)・普通5.2%(2件)・悪い10.0%(0件)

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】  
本企画「逝ける映画人を偲んで」は、かねてより、著名監督や俳優に限定されない幅広い映画人を追悼することで定評があり、フィルムセンターの存在を広く周知することにも貢献してきた。今回は4年半ぶりの企画であること、近年は、「日本映画の黄金時代」と呼ばれる1950年代に活躍した重要な映画人が対象となってきていることから、限られた会期中でどの作品を上映するかという作品選定は困難な作業であったが、結果として各ジャンルを網羅した我が国を代表する作品で番組編成ができたと考える。

【見直し又は改善を要する点】  
通常「逝ける映画人を偲んで」の特集は2年程毎に実施する企画であるが、2000年に日本を代表する3人の映画監督の特別追悼特集を実施したことにより、前回の実施(1998年:1997年の物故者を追悼)から、4年半余り経過しての実施となったため、4年間(1998-2001年)の物故者を回顧せざるを得なくなり、平成14年度から引き続いての企画となった。このことで平成16年度の上映計画への影響(清水宏監督の特集、市川崑監督の特集)が生じてしまった。また、物故者数もその分多かったことで番組編成等に従来以上の時間と調整が必要となったことにより、映画人を顕彰する意味での広報活動が充分行えなかった。今後は次回企画までの期間を開けすぎないように注意したい。

## 企画上映「発掘された映画たち2003」

### 方針

フィルムセンターの映画フィルムの収集・復元・保存事業の成果を集中的に上映する機会として、ロシアのゴスフィルムフォンドで発見された日本映画とその他様々な経緯により収集・復元が可能となった作品を併せ、これまでの「発掘された映画たち」シリーズより大幅に規模を拡大し53作品(28プログラム)を上映した。

### 実績

1.開催期間	平成15年5月27日～平成15年7月13日(42日間/84回)
2.会場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3.共催等	なし
4.上映作品数	28プログラム/53作品(1プログラム3回上映):延84回上映
5.入館者数	11,767人(目標入場者数 12,500人)
6.入場料金	一般500円,高校・大学生300円,小・中学生100円
7.入場料収入	4,651,500円(目標入場料収入 4,884,410円)
8.担当した研究官数	6人
9.講演会等	なし
10.広報	・印刷物(NFCカレンダー42,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ
11.上映会関連新聞・雑誌記事等	中日新聞(平成15年5月10日:夕刊),産経新聞(平成15年5月15日),東京新聞(平成15年5月15日),スポーツ報知(平成15年5月15日),毎日新聞(平成15年5月20日:夕刊),読売新聞(平成15年5月20日:夕刊),八重山毎日新聞(平成15年5月20日),陸奥新報(平成15年5月22日),上毛新聞(平成15年5月23日),新潟日報(平成15年5月23日),鹿児島新報(平成15年5月24日),赤旗(平成15年5月25日),十勝毎日新聞(平成15年5月25日),琉球新報(平成15年5月26日:夕刊),東京新聞(平成15年5月27日:夕刊),神戸新聞(平成15年6月4日),THE JAPAN TIMES(平成15年6月6日),琉球新報(平成15年6月16日:夕刊),日本経済新聞(平成15年6月19日:夕刊),定年時代(平成15年7月号)
12.アンケート調査	調査期間 平成15年7月8日～平成15年7月13日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収 アンケート回収数 11件 アンケート結果 ・良い72.7%(8件)・普通0.0%(0件)・悪い10.0%(0件)

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】 <p>2年ぶりとなる「発掘された映画たち」も、4回目を迎え、シリーズ企画として定着してきた。調査の結果として、新たに発見された映画フィルムや劣化・破損した映画フィルムを復元・上映するこの企画は、映画アーカイブとしてのフィルムセンターの役割を十分に果たすものであると考える。映画保存の最新の成果であるデジタル復元を施した作品『斬人斬馬剣』については、記者発表会を行うなど、積極的な広報活動により、その成果を広く周知した。また、特に著名ではない時代劇からドキュメンタリーに至る諸作品については、収集・復元担当研究員の協力のもと、関係者に積極的に接触することにより、予想を上回る広報の成果があったと考える。さらに「NFCニューズレター」上で若手映画研究者による新視点の作品解説を多数掲載し、新しい映画研究の流れを促したことも、本企画上映に関連して今回の企画がもたらした成果と考える。</p>
【見直し又は改善を要する点】 <p>企画の日数を長めに取り、1プログラムにつき3回上映したが、観覧者の分散を招き、目標入場者数に達しなかった。「斬人斬馬剣」、「新雪」、「五重塔」などの劇映画作品は、満席になるなど好評であったが、文化・記録映画では、その殆どが100人足らずの入場者数となった。今後は上映作品の内容を踏まえ、効果的な広報や観覧者の混乱を招くことのないスケジュール構成を考慮した上映計画の検討を行ってきたい。</p>

## 企画上映「映画監督 市川崑」

### 方針

大胆な実験精神とスタイリッシュな演出で現在も活躍中の市川崑監督の業績を顕彰する大規模な上映企画である。劇映画はもちろん、アニメーションから記録映画まで幅広い分野の作品を集め、全体を2期に分けて66作品(63プログラム)を上映した。

### 実績

- 1.開催期間 平成15年7月22日～平成15年10月5日(66日間/126回)
- 2.会場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
- 3.共催等 なし
- 4.上映作品数 66作品/63プログラム(1プログラム2回上映):延126回上映
- 5.入館者数 27,977人(目標入場者数 17,500人)
- 6.入場料金 一般500円,高校・大学生300円,小・中学生100円
- 7.入場料収入 11,443,400円(目標入場料収入 8,596,560円)
- 8.担当した研究官数 6人
- 9.講演会等 初日(7月22日)午後3時の回において市川崑監督の舞台挨拶を実施
- 10.広報
  - ・印刷物(NFCカレンダー62,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
  - ・ホームページ
- 11.上映会関連新聞・雑誌記事等  
スポーツ報知(平成15年7月4日),THE JAPAN TIMES(平成15年7月11日),朝日新聞(平成15年7月25日:夕刊),定年時代(平成15年8月号),読売新聞(平成15年8月6日:夕刊),赤旗(平成15年8月8日),読売新聞(平成15年8月12日),スポーツ報知(平成15年8月13日),読売新聞(平成15年8月15日:夕刊)
- 12.アンケート調査  
調査期間 平成15年9月30日～平成15年10月5日(6日間)  
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収  
アンケート回収数 22件  
アンケート結果 ・良い72.7%(16件)・普通18.1%(4件)・悪い10.0%(0件)

### 自己点検評価

- 【良かった点、特色ある取組み】  
企画の準備にあたっては、市川監督側との良好なコミュニケーションのもと、上映プリントの入手、広報資料作成をはじめとする作業を順調に進めることができた。作品選定については、従来上映機会のほとんどなかった貴重な作品(初期作品、人形劇映画、記録映画等)の収集にも努め、特に人形劇映画『トッポ・ジョージのボタン戦争』などについてはニュープリント作成のため作品の所在場所の調査やネガフィルム調査も行った。さらに、同監督によるCM作品の上映は、映画監督市川崑の全体像を紹介するという本企画にふさわしいものであったと考える。また、同監督による企画初日の舞台挨拶も新たな試みである。広報については、近年市川作品の再評価が比較的若い世代や女性層を中心に進んでいることを考慮し、広く女性誌等のメディアに広報資料を送付したことも新しい試みでもあり、結果として目標入場者数を大幅に上回ることができた。
- 【見直し又は改善を要する点】  
市川監督は多作な作家であり、また2か月半に亘る企画であるため、作品の状態や内容の確認に関して早めに取り組んだが、所蔵プリントのチェックとニュープリントの調達(とりわけ各作品のネガ保管の状況確認)に予想外の時間がかかった。これは所蔵プリントの遡及的な調査が行えていないことが一つの要因であり、過去に収蔵した作品の状態調査を行える環境づくりが今後の課題である。



## 企画上映「シリーズ・日本の撮影監督(1)」

### 方 針

映画の具体的な画面づくりを担う撮影監督の仕事にフォーカスを当て、日本映画の歴史上重要な撮影監督とその作品を選んで上映した。第1期となる今回は、日本映画の勃興期を形作った14名の撮影監督に照準を合わせ、48作品(46プログラム)を上映した。

### 実 績

1.開催期間	平成16年2月3日～平成16年3月28日(48日間/92回)
2.会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3.共催等	なし
4.上映作品数	48作品/46プログラム(1プログラム2回上映):延92回上映
5.入館者数	14,450人(目標入場者数 10,000人)
6.入場料金	一般500円,高校・大学生300円,小・中学生100円
7.入場料収入	5,557,200円(目標入場料収入 3,907,530円)
8.担当した研究官数	6人
9.講演会等	なし
10.広報	・印刷物(NFCカレンダー42,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ
11.上映会関連新聞・雑誌記事等	産経新聞(平成16年1月8日),赤旗(平成16年1月30日),日本経済新聞(平成16年2月3日),
12.アンケート調査	調査期間 平成16年3月23日～平成16年3月28日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し,記入後回収 アンケート回収数 30件 アンケート結果 ・良い 23.3%(7件)・普通 76.7%(23件)・悪い 0.0%(0件)

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】 <p>これまでフィルムセンターの殆どの上映企画は、主に映画監督、映画会社、製作年代、俳優、ジャンルといったテーマで行われてきたが、本シリーズは映画の画面作りに具体的に貢献する撮影監督という視点を取り上げ、それにより斬新な切り口を提供したと考える。特にこの第1回では、日本映画の勃興期を形作った14名の撮影監督を取り上げることで、忘れられつつある名カメラマンの仕事を顕彰するとともに、フィルムセンターの映画コレクションの中でも上映機会の少ない作品に日の目を当てることができた。また企画の期間中、これら撮影監督たちを直接知る現代の巨匠カメラマンを招いてトークを実施したこと(計3回)、そして往年の名撮影機をロビーで展示したことは、作品上映だけでは分りにくい往時の撮影システムを知るための良い機会となり、「撮影監督」にふさわしい企画とすることができた。</p>
【見直し又は改善を要する点】 <p>本企画における日本映画撮影監督協会(JSC)の協力は、資料提供や「NFCニューズレター」への執筆などの面でも積極的に進められたが、広報の面では、多数のカメラマンを擁する同協会内部への広報が充分ではなかった。シリーズ第2回以降は、この面でも早めの協力態勢を築きたい。</p>

## 共催企画上映「短篇映像メディアに見る現代日本」

### 方針

本年創立50周年を迎える社団法人映像文化製作者連盟との共催により、戦時中から戦後、現代に至る日本の諸相に関する記録映画、教育映画、産業PR映画、科学映画など多様なノンフィクション映画を紹介し、もう一つの映画文化の豊かさを探った。

### 実績

1.開催期間	平成15年9月16日～平成15年9月28日(12日間/36回)
2.会場	東京国立近代美術館フィルムセンター地下1階小ホール
3.共催	社団法人映像文化製作者連盟
4.上映作品数	18プログラム/66作品(1プログラム2回上映):延36回上映
5.入館者数	1,639人(目標入場者数 2,000人)
6.入場料金	一般500円,高校・大学生300円,小・中学生100円
7.入場料収入	609,800円(目標入場料収入 781,510円)
8.担当した研究官数	4人
9.講演会等	なし
10.広報	・印刷物(ちらし22,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ
11.上映会関連新聞・雑誌記事等	東京新聞(平成15年9月3日),赤旗(平成15年9月12日),信濃毎日新聞(平成15年9月),新聞協会報(平成15年9月23日),赤旗(平成15年9月24日)
12.アンケート調査	調査期間 平成15年9月23日～平成15年9月28日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収 アンケート回収数 300件 アンケート結果 ・良い84%(252件)・普通 6.6%(20件)・悪い10.3%(1件)

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】 本企画は、初めて映画関連の社団法人である映像文化製作者連盟と提携した企画である。その創立50周年企画として、番組編成は原則として同連盟が行ったが、この分野の名作が多数選ばれ、企画を深みのあるものにできたと思う。中でも、ビデオプロジェクターによるオリジナル・ビデオ作品の上映は新しい試みである。また、上映作品の内、同連盟が加盟各社から手配した映画フィルムの中には、この企画のために新規に焼き増したものが含まれ、その大半がフィルムセンターに寄贈されるなど、本企画はフィルム収集事業にも貢献したと考える。
【見直し又は改善を要する点】 本来、派手さに欠けるノンフィクション分野であることもあって、目標入場者数に達しなかった。今後同様の企画上映に当たっては、研究者、学生などへの広報をより一層強化する必要があると考える。

## 共催企画上映「日本におけるトルコ年記念事業 トルコ映画の現在」

### 方 針

「日本におけるトルコ年」を記念して、文化庁の協力のもと、駐日トルコ大使館との共催により、現代トルコのアート映画を代表するゼキ・デミルクブズ監督作品や、スター俳優の出演する商業的なヒット作など、近年評価の高まっているトルコ映画の近作10本を上映した。

### 実 績

1. 開催期間 平成15年10月9日～平成15年10月19日(10日間/20回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 駐日トルコ大使館
4. 上映作品数 10作品(1作品2回上映):延20回上映
5. 入館者数 2,751人(目標入場者数 3,000人)
6. 入場料金 一般800円,高校・大学生600円,小・中学生400円
7. 入場料収入 1,857,600円(目標入場料収入1,172,260円)
8. 担当した研究官数 2人
9. 講演会等 なし
10. 広報
  - ・印刷物(NFCカレンダー50,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
  - ・ホームページ
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等  
公明新聞(平成15年9月26日),朝日新聞(平成15年10月2日),毎日新聞(平成15年10月4日),東京新聞(平成15年10月7日:夕刊),赤旗(平成15年10月8日)
12. アンケート調査
  - 調査期間 平成15年10月14日～平成15年10月19日(6日間)
  - 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し,記入後回収
  - アンケート回収数 22件
  - アンケート結果 ・良い68.1%(15件)・普通4.5%(1件)・悪い10.0%(0件)

### 自己点検評価

- 【良かった点、特色ある取組み】  
フィルムセンターにとっては初めてのトルコ映画特集であることに加え、久々の近作の上映ということもあり、広報にあたっては通常と大きく異なる取組みを行った。具体的には、映画ファンばかりでなくトルコという国に関心を持つ観客層への広報に重点を置き、トルコ料理店、トルコ語教室、交流団体、カルチャーセンター等に対しても積極的に宣伝活動を展開した。また「トルコ年記念バッジ」の配布(トルコ大使館提供)やポスターの飾り付けなど、観覧者に対しても独自のサービスを行った。
- 【見直し又は改善を要する点】  
トルコ側との意思の疎通が、駐日トルコ大使館、トルコ外務省といった多数の機関を経由して行われたため、先方からの準備状況の伝達が円滑に行われなかった。このため、不完全な日本語字幕を焼きこんだ映画フィルムがトルコから到着し、再度別の字幕のない映画フィルムを取り寄せて日本で字幕の制作を余儀なくされるなどの弊害が生じた。共催者との円滑な連絡調整については、今後の検討課題と考える。
- なお、本企画は、10月3日から15日間の開催を予定していたが、上映予定作品(15作品)の内5作品について著作権者の許諾が得られず、10作品での上映となったことから実施期間を10日間に短縮して実施することになった。
- 目標入場者数が3,000人となっているが、これは当初の上映作品数の15本を前提に算出したものであり、上映日数が減少したことを考慮すると、2,751人の入館者数は健闘した数字といえる。

## 共催企画上映「聖なる映画作家, カール・ドライヤー」

### 方針

財団法人国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)、朝日新聞社との共催により、世界映画史上、著名なデンマークの映画監督、カール・ドライヤーの全長篇作品、主要な短篇作品を複数の会場で上映した。中でもフィルムセンター大ホールでは、その経歴の初期に当たる8本の作品を、英国人伴奏ピアニスト、ニール・ブランド氏の生演奏とともに紹介した。

### 実績

1.開催期間	平成15年10月28日～平成15年11月9日(12日間/24回)
2.会場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール、朝日ホール
3.共催	財団法人国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)、朝日新聞社
4.上映作品数	8作品(1作品3回上映):延24回上映
5.入館者数	5,345人(目標入場者数 3,500人)
6.入場料金	一般1,500円,高校・大学生1,400円,小・中学生1,000円
7.入場料収入	2,391,500円(目標入場料収入 1,367,630円)
8.担当した研究官数	2人
9.講演会等	座談会1回 参加人数227人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
10.広報	・印刷物(NFCカレンダー50,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ
11.上映会関連新聞・雑誌記事等	朝日新聞(平成15年9月24日),朝日新聞(平成15年10月7日:夕刊),日本経済新聞(平成15年10月10日),赤旗(平成15年10月10日),赤旗(平成15年10月28日),日本経済新聞(平成15年12月18日:夕刊)
12.アンケート調査	調査期間 平成15年11月4日～平成15年11月9日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収 アンケート回収数 10件 アンケート結果 ・良い70%(7件)・普通0.0%(0件)・悪い10%(1件)

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】 これまで「ジャン・ルノワール、映画のすべて。」「ハワード・ホークス映画祭」など朝日新聞社との共催による上映会を実施してきたが、今回は非営利ベースの日本国内巡回に実績のある、国際文化交流推進協会も加わったことにより、主要なドライヤー作品を東京以外の会場で上映できたことにより、地域での古典的な映画作品の鑑賞機会の提供が可能となった。また、渋谷の映画館ユロススペースにおいては、本企画の上映作品の一部を編集し予告編として同時期に上映するなど、広報面での協力を得た。今後ともこうした外部との協力関係は強化していくことが重要であると考え。フィルムセンターがプリントの借用交渉等を担当した多くの作品については、ヨーロッパの5つのFIAF加盟アーカイヴの協力を得て、最良版復元プリントでの上映が可能になったこと、また、無声映画の上映にあたっては無声映画伴奏の第一人者ニール・ブランド氏の優れた演奏を得たことなどにより、観覧者の高い評価を得ることができた。
【見直し又は改善を要する点】 フィルムアーカイブとしての活動成果を上映する企画は、継続して実施することが必要であり、これまでは経費的な面などから共催上映に頼らざるを得ない状況であったが、今後は、自主企画での実施も必要と考える。 なお、実施に当たった細かい部分での反省点としては、このような上映会の機会に映画保存や復元についての理解を深めるために個々の作品の復元作業等に関する情報の全てをカタログに反映できなかったことがある。

## 共催企画上映「小津安二郎生誕100年記念 小津安二郎の藝術」

### 方針

日本映画史上、著名な撮影監督、小津安二郎の生誕100年・没後40年記念として、松竹株式会社の共催により、小津監督の現存する全37作品、さらに小津監督が原作などに関わった関連4作品を紹介した。サイレント映画については、日本の7名のピアニストが生演奏を付して上映した。

### 実績

1.開催期間	平成15年11月18日～平成16年1月25日(53日間/157回)
2.会場	2階大ホール
3.共催	松竹株式会社
4.上映作品数	41作品(36プログラム)(1プログラム3～5回上映):延157回上映
5.入館者数	19,850人(目標入場者数 20,000人)
6.入場料金	通常上映 一般1,300円,高校・大学生1,000円,小・中学生800円 ピアノ伴奏付き上映 一般1,500円,高校・大学生1,200円,小・中学生1,000円
7.入場料収入	8,459,900円(目標入場料収入 7,815,050円)
8.担当した研究官数	4人
9.講演会等	シンポジウム1回(2日間) 参加人数 人(詳細は「教育普及 講演会等欄へ)
10.広報	・印刷物(NFCカレンダー20,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ
11.上映会関連新聞・雑誌記事等	朝日新聞(平成15年9月24日:夕刊),新潟新報(平成15年10月15日:夕刊),日本経済新聞(平成15年10月20日),河北新報(平成15年10月20日),東京新聞(平成15年10月28日:夕刊),朝日新聞(平成15年10月30日),公明新聞(平成15年10月31日),朝日新聞(平成15年11月11日),朝日新聞(平成15年11月15日),赤旗(平成15年11月16日),朝日新聞(平成15年11月18日),朝日新聞(平成15年11月21日:夕刊),産経新聞(平成15年12月7日),東京新聞(平成15年12月9日:夕刊),読売新聞(平成15年12月13日),朝日新聞(平成15年12月17日)
12.アンケート調査	調査期間 平成16年1月20日～平成16年1月25日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収 アンケート回収数 45件 アンケート結果 ・良い 88.8%(40件)・普通 6.6%(3件)・悪い %(0件)

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

本企画の特色として、小津監督のほとんどの作品の製作会社、著作権者である松竹株式会社と共催したことがあげられる。また、フィルムセンターにおける小津安二郎監督の全作品上映は22年ぶりであることに加え、前回以降新たに発見された『突貫小僧』、デジタル復元された『和製喧嘩友達』、小津が原作や脚本を提供した他の監督による作品も上映した。さらに、初期の無声映画に国内の7名のピアニストが生演奏を付すことで、小津映画の新たな鑑賞方法を提案することができた。また、現存するスチル写真等によって、小津監督の初期の作品を回顧する展示企画「映画資料でみる蒲田時代の小津安二郎と清水宏」を同時開催することにより、小津監督の作品世界の理解を一層促進することができた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

わが国を代表する映画監督の特集であったが、観覧者数が目標入場者数にわずかに届かなかった。生誕100年の記念日(12月12日)に合わせて、DVD発売やテレビ放映がすべて重なってしまったことや、共催者の意向による観覧料金の設定が高かったことなどが、観覧者数が相対的に少なかったことの一因である。今後は、開催期間におけるテレビ局等の他の放映媒体による観客層への働きかけや観覧料金観覧の設定を慎重に行うとともに、より一層効果的な広報活動を検討することとしたい。

## 共催企画上映「特集上映 清水宏 生誕100年」

### 方針

第4回東京フィルメックスとの共催企画として、小津安二郎と同じく本年生誕100年を迎えた清水宏監督の代表作10本(フィルムセンター小ホール8作品、有楽町朝日ホール2作品)を上映した。すべての作品には英語字幕が付された。

### 実績

1.開催期間	平成15年11月22日～平成15年11月30日(9日間/26回)
2.会場	東京国立近代美術館フィルムセンター地下1階小ホール及び有楽町朝日ホール
3.共催	特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会
4.上映作品数	フィルムセンター:8作品(1作品3回上映):延24回上映 有楽町朝日ホール:2作品(1作品1回上映):延2回上映
5.入館者数	フィルムセンター 2,582人(目標入場者数 - 人) 有楽町朝日ホール 770人(目標入場者数 - 人)
6.入場料金	フィルムセンター:一般1,000円,高校・大学生800円,小・中学生600円 有楽町朝日ホール:前売券1,200円,当日券1,500円 ピアノ伴奏付き上映:S席前売券2,500円,S席当日券3,000円 A席前売券2,000円,A席当日券2,500円
7.入場料収入	フィルムセンター開催のみ1,050,900円(目標入場料収入 - 円)
8.担当した研究官数	4人
9.講演会等	なし
10.広報	・共催者による印刷物の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ
11.上映会関連新聞・雑誌記事等	朝日新聞(平成15年10月17日:夕刊),朝日新聞(平成15年11月12日),THE JAPAN TIMES(平成15年11月14日),赤旗(平成16年1月9日)
12.アンケート調査	調査期間 平成15年11月22日～平成15年11月30日(8日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収 アンケート回収数 273件 アンケート結果 ・良い69.9%(191件)・普通2.5%(7件)・悪い10.0%(0件)
13.その他	小津安二郎と同じ2003年に生誕100年を迎える映画監督・清水宏については、誕生日が平成14年度である平成15年3月28日であることや、年度全体の経費上の問題もあり、年度計画には含めなかった。 しかし、平成15年度に入ってから、NPO法人東京フィルメックス実行委員会が清水宏の生誕100年記念上映を計画し、フィルムセンターに対し作品借用又は共同開催について打診があった。同委員会と経費や役割分担等について協議した結果、小津安二郎監督特集の時期に、同映画祭の回顧上映部門として、急遽、小ホールを会場とし、共催上映することとした。

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】  
本企画の特色として、これまでのような映画祭へのプリント提供ではなく、映画祭との共同開催であったことにより、広報の媒体の違いやこれに伴う観覧者層の拡大や共催者が良質のプログラムでも評価の高い映画祭である東京フィルメックスであった点があげられる。同映画祭の方針に沿い、全作品に英語字幕を付したことにより、国内の映画ファンばかりでなく、映画祭関係者を始めとする来日映画人にも清水作品の真価を周知できたと考え。上映作品『簗』が観覧者の人気投票で観客賞を受賞、映画祭審査員長から各賞の発表とは別に特別言及があったことは本企画の成果の現れと考え。同時期に、現存するスチル写真等によって、清水監督の初期の作品を回顧する展示企画「映画資料でみる蒲田時代の小津安二郎と清水宏」を同時開催することにより、清水監督の作品世界の理解を一層促進することができた。また、本特集後の2月に行われたベルリン映画祭では、清水宏の特別プログラムが組まれるなど、国際的にも発展性の高い企画となった。

【見直し又は改善を要する点】

35mmフィルムと比較して画質の劣る16mmフィルムを上映する作品については、ちらしにその旨を提示して欲しいとの要望が観覧者から寄せられた。今後は、特に画質の劣る作品を上映する際には、印刷物等によって観覧者に事前にフィルム素材に関する情報を可能な限り提供することとしたい。

## 「展覧会 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展

### 方針

フィルムセンターの半世紀に亘る活動の中で収集された資料を「日本映画の草創期」から「戦後の黄金期」まで5つの時代に分け、これらを映画保存史の観点から眺めるとともに、(各時代の中から)散逸を免れて現存する映画遺産を紹介した。また、これまでにフィルムセンターが行ってきた映画の発見・復元の成果を紹介しながら、我が国における映画遺産の散逸の歴史と映画保存運動の軌跡をたどった。

約1ヶ月の休館により、展示替を行い展示室の中に新たに企画展用のスペースを確保する一方、それまでの「展覧会 映画遺産」の展示面積を1/2に縮小し、点数も363件から198件に縮小して常設的展示として再オープンした。内容はこれまでどおりフィルムセンターが所蔵する映画関係資料を紹介しながら、我が国における映画の散逸の歴史とフィルムの収集活動の成果をたどるものである。今後は常設的展示の長所を活かし、代表的な所蔵品や基礎的な映画資料(とりわけ撮影機や映写機のような大型のコレクション)に身近に接することのできるスペースとしての機能を充実させていく。

### 実績

- 1.開催期間 平成15年4月8日～平成15年10月19日(154日間)、(平成14年11月26日から継続開催)  
平成15年11月18日～平成16年3月28日(102日間)
- 2.会場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室
- 3.出品点数 363件(平成15年11月18日から198件に縮小)
- 4.入館者数 平成15年10月19日まで5,305人(目標入場者数 5,000人)
- 5.入場料金 個人ノ一般200円,大学生70円,高校生40円,小・中学生無料  
団体ノ一般100円,大学生40円,高校生20円,小・中学生無料
- 6.入場料収入 平成15年10月19日まで397,050円(目標入場料収入 766,320円)
- 7.担当した研究員数 6人
- 8.展覧会の内容  
映画部門専用となったフィルムセンター展示室の開幕企画となった本展は、フィルムセンターの前身であるフィルム・ライブラリー時代から50年の間に収集した膨大な映画資料の中から、映画人の遺品や初期の映画機材など、特に公開の機会が限られていた珍しいコレクション360点あまりを集めて展示する。
- 9.講演会等 なし
- 10.広報  
・印刷物(ポスター1,000枚,チラシ40,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。  
・ホームページ
- 11.上映会関連新聞・雑誌記事等  
(平成15年4月以降)  
・映像学 平成15年5月25日(通巻70号)
- 12.アンケート調査  
(平成15年4月以降11月19日まで)  
調査期間 平成15年5月13日～平成15年5月18日(6日間)  
平成15年7月8日～平成15年7月13日(6日間)  
平成15年10月14日～平成15年10月19日(6日間)  
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収  
アンケート回収数 31件  
アンケート結果 ・良い80.6%(25件)・普通6.4%(2件)・悪い16.4%(2件)

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】  
観覧規則の改正により、平成15年度から学生料金を大学生と高校生に区分し、且つ、料金の減額を行った。  
入館者の約4割が江戸開府400年記念事業である「東京・ミュージアムぐるっとパス」事業(参加した施設の常設展に入場可能となる共通入館券制度)による入館者となった。限られた展示面積(343㎡)の中ではあるが、常設的展示と企画展を実現することにより、フィルムセンターの中に常時基礎資料の展示を行うスペースを定着させることができた。映画保存事業の意義をアピールした



内容や多数のモニターを採用した映像展示など「展覧会 映画遺産」の趣旨もほぼそのままに温存することができた。また、オープン当初の展示内容を収録した図録を新たに刊行したことで、展覧会の規模縮小を補いつつ、観覧者の理解をより一層促進することを目指した。

会期中の夏休みに実施した「子ども映画館」において小・中学生が無料で観覧できることを周知したため、小人の入館者数が同展の平成14年度に比較し約2倍の入館者数(153人)となった。

【見直し又は改善を要する点】

今後は、展示面積が半減した本展覧会の質の向上をいかに図るかが課題と考える。

## 「映画資料でみる蒲田時代の小津安二郎と清水宏」展

### 方 針

「展覧会 映画遺産」の展示面積を1/2に縮小し、展示室内に新たに企画展用のスペースを確保し、使用して行う最初の展覧会として、小津安二郎と清水宏の生誕100年を記念した上映企画「小津安二郎の藝術」、「清水宏 生誕100年」の関連企画として実施した。2人がデビューし、若き日を過ごした松竹蒲田撮影所時代には、小津が35本、清水が96本の作品を完成させている。しかし、このうちそれぞれ17本、85本が現存していない。今回の企画では、これらの現存しない作品をスチル写真など映画資料363点で回顧した。

### 実 績

- 1.開催期間 平成15年11月18日～平成16年3月28日(102日間)
- 2.会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室
- 3.共催等 なし
- 4.出品点数 企画展「蒲田時代の小津安二郎と清水宏」 363点
- 5.入館者数 5,494人(目標入場者数 3,000人)
- 6.入場料金 一般200円,シニア・大学生70円,高校生40円,小・中学生無料
- 7.入場料収入 434,490円(目標入場料収入 459,790円)
- 8.担当した研究員数 2人
- 9.講演会等 なし
- 10.広報
  - ・印刷物(ポスター1,000枚,チラシ40,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
  - ・ホームページ
- 11.上映会関連新聞・雑誌記事等
  - サンケイスポーツ日曜特別版(平成15年10月26日),定年時代(平成15年12月号),赤旗(平成15年12月2日),神戸新聞(平成16年1月5日)
- 12.アンケート調査
  - 調査期間 平成16年1月20日～平成16年1月25日(6日間)
  - 平成16年3月23日～平成16年3月28日(6日間)
  - 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し,記入後回収
  - アンケート回収数 85件
  - アンケート結果 ・良い 27.0%(23件)・普通 70.6%(60件)・悪い 2.4%(2件)

### 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】  
平成14年度の検討課題として部分的な展示替えや常設的展示と企画展の両立があげられ、平成15年度はその課題に対応するため、初めて企画展を開催した。  
上映企画にあわせて、現存しない作品についても、関係資料によって展示企画を開催した試みは、保存機関ならではの特色を示すことができたと考える。展示品は国立国会図書館から寄贈された戦前のキネマ旬報社調査部の旧蔵資料と「みそのコレクション」の呼称で有名な御園京平氏の旧蔵資料から集められたものであり、製作会社に残されていない素材も多く含まれている。解説では各作品のスタッフ・キャスト表やあらすじ、被写体となっているスターの人名を記して作品の雰囲気や擬似的に体験できるよう心がけた。

【見直し又は改善を要する点】  
全ての展示品は原則としてオリジナルによっているが、保存上の観点から、今後は一部の印刷媒体や写真媒体をレプリカに置き換えていく作業が必要と思われる。また、今後は、本展覧会と企画上映の関連性や連携を考慮した展示について検討することしたい。

## 優秀映画鑑賞推進事業

### 方針

「優秀映画鑑賞推進事業」は、文化庁とフィルムセンターが、日本映画製作者連盟、全国興行環境衛生同業組合連合会などの協力のもと、全国各地の公立文化施設などと共同して、優れた日本映画の良質な35mmプリントを提供する巡回上映事業のプログラムである。平成15年度の上映作品は4作品を1プログラムとし、20プログラムでの実施となった。

### 実績

1.開催期間	平成15年7月10日から平成16年3月13日までの間
2.会場	栃木県、埼玉県、鹿児島県を除く全国44都道府県の176会場
3.主催	文化庁、東京国立近代美術館フィルムセンター
協力	(社)日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会
その他	各開催会場において協力等の団体あり
4.出品点数	20プログラム(各4作品、計80作品)
5.入館者数	入場者数計:81,293人(目標66,637人以上)
6.入場料金	500円以内
7.入場料収入	- 円
8.担当した研究員数	2人
9.展覧会の内容	
10.講演会等	なし
11.広報	各実施会場で実施
12.アンケート調査	
調査期間	平成15年7月10日～平成16年3月13日
調査方法	アンケート用紙を配布し、集計されたものを各会場より回収する
アンケート回収数	15058件(平成16年3月31日までに回答のあった153会場について)
アンケート結果	・良い178%(件)・普通7%(件)・悪い12%(件)・無回答13%(件)
内訳	通常プログラム 13033件(127会場) 有効回答数 13005件 良い178%・普通7%・悪い12%・無回答13%
	親子プログラム 大人 1608件(26会場) 有効回答数 1604件 良い175%・普通4%・悪い11%・無回答20%
	親子プログラム 子供 449件(22会場) 有効回答数 449件 良い81%・普通2%・悪い13%・無回答4%

### 自己点検評価

<p>【良かった点、特色ある取組み】</p> <p>観客層には中高年者が多く、内容的には映画館などで見る機会の少ない、日本映画の名作や大ヒット作品が鑑賞作品として選ばれる傾向が強い。ただし、近年各地で催される映画祭や定期的な上映活動の一環として特色ある作品を選び、上映するといった例も増えている。また、平成14年度から全20プログラムの内、親子が揃って楽しめる4プログラム(親子プログラム)に関するアンケートを通常のアンケートとは別に実施しているが、アンケート用紙を事業実施直前に会場に送付することで、回収数の増加を図った。</p> <p>15回目となる平成15年度は、昨年度より2県少ない44都道府県での実施となったが、これまで開催実績のなかった長崎県を加えることができた。会場数では176会場にのぼり昨年度に比して13会場増加(新規会場39会場)した。期間中の入場者数は総計で81,293人にのぼった。親子プログラムに対しては、スクリーンで映画を見る楽しさを実感したという感想が多く寄せられるとともに、平成15年度に初めて小学校での上映も全国3会場で実施され、当該事業をめぐる環境の変化をうかがわせた。</p> <p>【見直し又は改善を要する点】</p> <p>これまで、開催を希望する全ての会場で実施してきたが、実施希望会場数が年々増加する傾向にある。現行の巡回システムでは、これ以上の会場の増加は、プリントへのダメージから断裂など上映に支障を生じるトラブルが起きる可能性がある。このため、今後は、既に定着して毎年継続して実施している会場よりも、新規に実施を希望する会場を優先することや、事前に各都道府県に開催希望数の制限を設けるなどの制約を検討せざるを得ない状況である。平成15年度は来年度からの実施方法の見直し等の検討を行ったが、文化庁が新規に予算計上した「日本映画・映像」振興プランの推進事業とこの優秀映画鑑賞推進事業の内</p>
---

容が競合する可能性があることから、文化庁の事業の内容が明らかになった段階で、平成17年度からの実施内容について検討を重ねていくこととしたい。

## (2) 貸与・特別観覧の状況

### 中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

### 実績

#### 貸与・特別観覧の件数

##### 映画フィルム

貸与	29件(63本)
特別映写	90件(231本)
複製利用	38件(69本)

##### 映画資料

貸与	8件(116点)
特別観覧	28件(89点)

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

映画フィルム及び映画関係資料の貸与については、著作権者の許諾を得ながら、できる限りの便宜を図ることに努めた。映画フィルムの貸与については、第16回東京国際映画祭に13本の日本劇映画を出品したのをはじめ、山形、宝塚、青森県浪岡町など、全国各地で行われている実績ある映画祭に日本及び外国劇映画ならびに日本文化・記録映画を出品した。また、映画振興、地域振興など、貸与の目的にふさわしい地方公共団体などの施設で行われる企画上映に対し、貸与を行った。海外への貸与としては、第4回東京フィルメックスとの共催より大きな反響を呼んだ「特集上映 清水宏 生誕100年」が平成16年2月にはベルリン映画祭でも開催され、主催者である FIAF 会員のドイツ・キネマテーク財団に5本の貸与を行った。同じく FIAF 会員であるチネテカ・ディ・ポローニャ、ジョージ・イーストマン・ハウス、オーストリア・フィルム・アーカイブ、オーストリア映画博物館に、日本及び外国劇映画を貸与するとともに、ロカルノ、カタルニャ、テサロニキなど、国際的に知名度の高い国際映画祭の回顧上映に対して、日本劇映画の出品を行った。また、昨年に引き続き、韓国における国際映画祭への出品は、チョンジュ、プチョン、クァンジュの各映画祭を併せて5本の日本劇及び文化記録映画の出品を行い、日韓間の映画による文化交流を深める上で貢献できたと考えている。

映画フィルムの複製利用については、著作権者及び著作権者から許可を得た製作会社等の依頼により、ビデオ原版の作成やテレビ番組制作などに協力した。なかでも、社団法人映像文化製作者連盟と株式会社紀伊国屋書店の企画によるDVD全12巻の「日本アートアニメーション映画選集」では、25本の日本アニメーション映画のDVD化に協力した。また、神奈川県立歴史博物館が主催した「特別展 関東大震災といま」、京都文化博物館が主催した「企画展 KYOTO 映像フェスタ」、讀賣新聞東京本社が主催した「シンポジウム 日露戦争百周年」では、関東大震災及び日露戦争に関する所蔵作品の一部が、複製貸与と利用によって映像資料として展示上映された。

映画関係資料の貸与は、東京都江戸東京博物館で開催された「エノケンとレビューの時代」や京都府京都文化博物館で開催された「京都映像フェスタ」、国立歴史民俗博物館で開催中の「民衆文化とつくられたヒーローたち」など、計8件の展覧会に対して行った。申請が映画の上映施設以外の博物館やその内容が上映会以外の展覧会である場合も多く、幅広い用途に対し、映画資料の需要が高まっていることが判る。また、ドイツ映画博物館(フランクフルト)で開催された黒澤明展に貢献できたことも特筆される。

このほかに、出版物やテレビ番組などを中心とする図版提供も28件に上った。これらは雑誌復刻への原本提供や、テレビドラマで使われる小道具製作のための素材提供、映画会社(著作権者)による自社管理用スチル写真の作成なども含むものである。

#### 【見直し又は改善を要する点】

映画フィルムの貸与及び複製利用に当たっては、著作権者の許諾を得て、その申請を受けているが、著作権者が不明の場合や著作権者によっては、許諾手続きが複雑な場合があり、結果として許諾を受けるのに相当な時間を要することがある。

フィルムセンターは貸与及び複製利用の依頼を受ける立場ではあるが、例えば、貸与直前まで手続が遅れたときであっても著作権者の貸与の許諾があった場合に、それを不許可とすることは、フィルムセンターが今後、事業を円滑に進めていく上で、事実上困難である。過去の事例では実際に許可を出すに際し、相手方の事務手

続きの遅れにより、業務に支障をきたすことがあった。これは、著作権者の権利保護のため避けられない面ではあるが、より迅速な貸出業務等を進めるに当たり、今後とも著作権者との間で許諾手続きについて、検討を重ねていく必要がある。

また、映画関係資料の貸与や図版提供は、情報・資料系の設置以来データベースの構築や物品の管理が進み、アクセス対応のための作業が飛躍的に効率化していることを背景にしている。新規収録資料の登録作業とのバランスを考慮しながら、過去3年間でスチル写真を対象とする遡及登録とID付与の8割以上を終えるに至っているが、今後はポスターやシナリオを対象に環境整備を進めていく必要がある。

\* 添付資料

貸与件数の推移（事業実績統計表 p.8）

特別観覧件数の推移（事業実績統計表 p.9）

### 3. 調査研究

#### 中期計画

- (1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。
- 1 収蔵品に関する調査研究
  - 2 美術作品に関する調査研究
  - 3 収集・保管・展示に関する調査研究
  - 4 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
  - 5 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等
- (1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。
- (2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

#### 実績

1. 調査研究
- (1) 収蔵品の調査研究
- ・反町コレクション(衣笠貞之助及び大映関係資料)の調査研究
- (2) 展覧会のための調査研究
- ・「発掘された映画たち2003」に関する調査研究
  - ・市川崑監督作品に関する調査研究
  - ・現代トルコ映画に関する調査研究
  - ・カール・ドライヤー監督作品に関する調査研究
  - ・小津安二郎監督作品に関する調査研究
  - ・日本映画勃興期の撮影監督に関する調査研究
  - ・蒲田撮影所時代の小津安二郎と清水宏についての調査研究
- (3) 保存・修理に関する調査研究
- ・アメリカの無声映画の残存率についての調査研究(デイヴィッド・ピアス論文の翻訳)
  - ・スウェーデンにおける映画保存、アーカイヴについての調査研究
  - ・アメリカにおける映画保存、アーカイヴについての調査研究(ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真映画博物館)
  - ・カラー映画フィルムの褪色に関する世界の取り組みについての調査研究(FIAF 会議での講演と報告)
  - ・デジタル技術を用いた映画フィルムの修復に関する調査研究
  - ・ナイトレート・フィルムの保存と修復に関する調査研究
- (4) 映画関係資料に関する調査研究
- 平成14年度の「展覧会 映画遺産」のために発掘した最古の和製映写機(早稲田大学演劇博物館所蔵)については研究員レベルで調査結果をまとめ所蔵館にも報告を行ったほか、関係者の所在などもつきとめた。
- (5) 研究活動の活用等
- 当センターの調査研究の成果は、隔月で発行している「NFCニューズレター」に掲載した。NFCニューズレターは、大学等の研究機関、図書館等の団体と映画研究者や評論家等の約700件に配布し、研究者等の参考に資している。
- (6) シンポジウムの開催
- ダン・ニッセン講演会
- 上映企画「聖なる映画作家、カール・ドライヤー」の関連イベントとして、ドライヤー映画の保存と研究の専門家ダン・ニッセン氏を講師として招聘し、講演会を行った(開場は朝日ホール)
- 小津シンポジウム
- 小津安二郎生誕100年記念の共催上映、展示企画にあわせて、朝日新聞社、松竹(株)、国際交流基金とシンポジウムを

共同で開催した。小津に関する高い国際的評価を反映して、国の内外から著名な映画監督、評論家を集めての大規模な会合となった。

#### ヨハン・プライス講演会

世界的な映画フィルムの修復技術者ヨハン・プライス氏を講師として招聘し、ナイトレート・フィルムの保存と修復に関して包括的な講演会を開催した(立命館大学、鳥取県三朝町との共催企画)。

#### (7) 特別映写等による外部への研究協力

大学等の映画に関する研究・教育等及び映画製作等の製作のための調査への協力の一つとして特別映写の機会を提供している。この制度を活用して、平成15年度は、4月から東京芸術大学の映像・舞台芸術実験授業に、10月からNPO法人映画美学校が主催する映画上映専門家養成講座の上映講義への協力を、継続的に行った。8月には協力事業として小ホールで開催された、東京大学大学院文化資源学研究室等主催によるシンポジウム「関東大震災と記録映画～都市の死と再生」に関わる特別映写を行った。また、早稲田大学、成城大学、明治学院、武蔵野美術大学、京都造形芸術大学、立命館大学などの映画研究者や、アメリカ、イギリス、スペイン等海外の日本映画研究者にも、論文執筆や研究発表のために特別映写の機会を提供した。その他、撮影監督協会、シナリオ作家協会、NPO法人日本映画映像文化振興センター等映画関連団体の研修や、「丹下左膳」の再映画化や「森は生きている」の舞台化等に際して、映画制作会社や劇団等に協力した。

#### 2. 客員研究員等の招聘実績(年度計画記載人数: 3人)

所蔵映画フィルムの総合的なデータ分析とカタログ及び目録作成

客員研究員氏名: 北小路隆志(千葉大学非常勤講師、他)

研究内容: 戦前期の所蔵日本ニュース映画の目録作成のために、各プリント内容の調査研究、データの集積及び必要に応じて不足分データの補充と、データベースとして全体の統一を図るための調査研究。

所蔵映画関連資料に関するデータ構築と総合的な研究調査及び書誌作成

客員研究員氏名: 安澤秀太(フリー編集者、翻訳者)

研究内容: 平成10年度にNHK放送文化研究所から寄贈された「反町茂雄コレクション」(映画監督・衣笠貞之助の生涯資料ならびに映画会社・大映の内部資料)の整理・特定・分類調査、ならびに登録・データベースの構築(継続)。

外国映画に関する事業等の企画の共同研究

客員研究員氏名: 溝口彰子(フリー翻訳者)

研究内容: 平成15年度以降に実施を検討している上映事業にかかわる調査、及びFIAF加盟の同種機関との映画史的、アーカイブ的な事例に関する調査等。

3. 調査研究費 予算額 10,515,412円 決算額 27,586,153円

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

「映画監督 市川崑」と「日本の撮影監督(1)」の実施に関する調査研究については、それぞれ市川崑監督の事務所(アトリエ21)、日本映画撮影監督協会からの資料提供を得ることができた。

近年、国内の大学やその他の団体が映画の研究のためにフィルムセンターの特別映写観覧を利用することが多くなってきている。この結果、研究者が集うことになりその情報の交換や交流が映画研究に役立っている。

#### 【見直し又は改善を要する点】

フィルム・アーカイブとしての調査研究は、国内に同種機関がないため、その殆どが国際フィルム・アーカイブ連盟加盟の諸外国の同種機関からの情報提供により進められていることが多い。今後は、フィルムの保存研究について、国内の大学や民間との連携を図り、より一層充実させることを検討していく。

#### \* 添付資料

調査研究一覧(事業実績統計表 p.103)



## 4. 教育普及

### 中期計画

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。  
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。  
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。  
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。  
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

### 方針

1. 資料収集及びレファレンス機能の充実  
図書室には、わが国で刊行された映画関係の図書をできる限り収集し、閉架式閲覧サービスを行うとともにコピーサービスを実施した。なお、新刊雑誌や利用度の高い基礎文献・雑誌については開架で閲覧できるスペースを整備した。
2. 映画鑑賞を通じて子どもたちの幅広い人間形成に資することに努めた。
3. 講演会の実施  
平成15年度は、カール・ドライヤー監督に関する講演会や小津安二郎監督の生誕百年を記念した企画上映に合わせたシンポジウムを実施し、両巨匠監督の芸術に関する総合的研究の促進を目指した。
4. 映画製作専門家養成講座の開催  
この講座は、映画、テレビ、ビデオ製作など、映像製作の諸分野で助手等の現場経験を有する人や映画・映像に関する専門学校などで実習経験を有する人を対象とし、日本映画の優れた伝統を継承し、次世代の映画製作現場を担うことのできる豊かな人材を育成することを目的とした。
5. 博物館学実習を行うことにより、将来の映画研究者等を育成した。
6. 次の発行事業を実施し、広報活動の充実を図った。

- ・企画上映に伴う図録の発行 1冊
- ・企画展示に伴う図録の発行 1冊
- ・「優秀映画鑑賞推進事業」鑑賞の手引きの発行
- ・展示室での展示企画のチラシ
- ・展示室での展示作品の出品リスト
- ・講演会チラシ
- ・「NFCニューズレター」の発行 隔月刊 6冊
- ・企画上映のための「NFCカレンダー」を発行 企画毎発行
- ・「こども映画館」チラシ

7. ホームページを活用し、フィルムセンターの概要、企画上映を含む活動一般などの情報の公開に努めるほか、職員募集などの事務的な活動にも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。  
また、ホームページで発信できる情報についての検討を行い、できるものから順次更新作業を行った。

## 実績(総括表)

- (1) - 1 資料の収集及び公開  
 収集件数(図書) 995冊(平成15年度間)  
 公開場所(図書) フィルムセンター図書室  
 利用者数(図書) 3,174人
- (1) - 2 広報活動の状況  
 刊行物による広報活動 4種 12冊  
 ホームページによる広報活動  
 マスメディアの利用による広報活動
- (1) - 3 デジタル化の状況  
 所蔵映画フィルムについてのデータベース構築のための作品タイトル及び監督等のスタッフ、出演者等のキャストやフィルムの長さ等のデータ等を文字情報としてデジタル化を実施。
- (2) - 1 児童生徒を対象とした事業  
 小・中・高校生を対象とした「こども映画館」の実施 19回 1,293人(平成15年度分のみ)  
 相模原分館における児童生徒を対象とした上映会 2回 214人
- (2) - 2 講演会等の事業  
 シンポジウム 1回 1,538人  
 講演会 2回 378人
- (3) - 1 研修の取組  
 映画製作専門家養成講座の実施。
- (3) - 2 大学等との連携  
 平成14年度から再開した博物館学実習生の受け入れを継続。
- (3) - 3 ボランティアの活用状況  
 7階展示室の映画部門専有化に伴う映画の歴史等の解説やこども向け上映会での解説へのボランティア等との連携協力を検討する。
- (4) 渉外活動  
 平成14年度に引き続き「こども映画館」へ参加したこどもたちへの記念品の提供について企業から協力を受けて実施した。また、映画部門の展示に関して展示映像への著作権者として映画製作者からの協力を受けた。今後は、より積極的に企業との連携を行い業務の充実を目指す。
- (5) 教育普及経費 予算額 55,471,875円 決算額 76,364,985円
- (6) その他  
 「こども映画館」の実施に際して、企業からの記念品の提供、博物館学実習生の受入等の教育普及事業を実施した。

## 自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】  
 「こども映画館」に企業の協力が得られたことは、今後の同事業展開に対して有力な方法であったと思われる。また7月に創刊した「NFCメールマガジン」は、「こども映画館」の広報にも活用されている。

【見直し又は改善を要する点】

昨年度からの検討事項であった広報活動に力を入れた結果、「こども映画館」については、昨年度に比較して約1.4倍の入場者を得ることができたが、内部的な目標者数(2倍)に達することができなかった。より効果的な広報活動の在り方を検討するとともに、子ども、保護者及び学校関係者等からの意見聴取を行い、子どもの生活に適合したスケジュール作り、学校カリキュラムとの連携などを視野に入れて事業を活性化させていきたい。

\* 添付資料 教育普及件数の推移 (事業実績統計表 p.13)

## (1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況

### 中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

### 実績

#### 1. 収集

件数 995件(目標 - 件)

#### 2. 公開

公開場所 フィルムセンター図書室(4階)

公開日数 174日間

公開件数等

・利用者数 3,174人

・公開資料数 22,377件

・閉架利用件数 1,067件

・複写利用数 1,290件(16,953枚)

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

平成15年度は新刊図書の収集、整理、公開に加え、創刊以来31年分におよぶ雑誌「ぴあ」のバックナンバーを合冊製本して閲覧図書のより一層の充実に努めた。また、図書検索システム(OPAC)は昨年度にWeb上での公開を実現したが、平成15年度は閲覧室内の端末を2台に増やし、閲覧者のサービス向上に寄与した。

#### 【見直し又は改善を要する点】

土曜日の開室については、引き続き平成15年度も検討課題となっていたが、来年度から土曜日の開室を行う予定である。経費的な面とサービスの質を考慮した結果、1日の開室時間を減らさざるを得ないこととなったが、利用者が少ない午前中を閉室とし、終業時間を延長するなどの工夫を行った。来年度は利用者の反応を見守り、今後の活動に活かしていく考えである。

## (1) - 2 広報活動の状況

### 中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

### 実績

#### 1. 広報誌名

##### (1) NFCニューズレター

発行年月日 偶数月発行(発行回数6回、発行部数6冊)(年度計画記載発行回数6回)

料金 1部300円

配布先 会場での販売、各都道府県の中央図書館、大学等

##### (2) カレンダー(上映会予定表)

発行年月日 企画番組毎1回発行(発行回数6回)(年度計画記載発行回数6回)

料金 無償

配布先 会場内配布、都区内生涯学習施設、大学等

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

企画の広報活動としては、上映企画ごとの「NFCカレンダー」を中心に「蒲田時代の小津安二郎と清水宏」「こども映画館」「ヨハン・プライス講演会」についてはチラシを作成するとともに、その情報をホームページでも公開した。このほかカタログについては、共催上映の「聖なる映画作家、カール・ドライヤー」特集と、常設的展示である「展覧会 映画遺産」展で刊行し、広報活動に役立てることができたと考える。

平成15年度は、企画の内容にあわせて広報の依頼先を分析・厳選するとともに、特集によっては外部メディアを通じた招待券の提供など、企画を効果的に紹介できるよう広報の充実を努めた。

また、フィルムセンターの広報紙として隔月に刊行している「NFCニューズレター」では、企画関連の記事から映画保存の最新情報までの幅広いテーマを扱い、映画関係者、研究者などに広く配布されている。

ホームページについては、平成13年度にフィルムセンターの事業を総合的に紹介できるよう、その構成を大幅に変更した。その後は、コンテンツの充実を努めてきたが、平成15年度は「NFCメールマガジン」を創刊し、フィルムセンターの企画や刊行物に関する最新情報を発信することにした。

#### 【見直し又は改善を要する点】

今後もホームページによる情報提供の充実を図るとともに、広報活動に対する一般利用者の意見の収集に努め、広報活動の一層の充実を努めたい。

## (1) - 3 デジタル化の状況

### 中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
- また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

### 実績

#### 1. 所蔵作品のデジタル化

- (1) 所蔵映画フィルムについてのデータベース構築のための文字情報のデジタル化を実施。

平成15年度にデジタル化したデータ件数 1,944件(目標 - 件)

平成15年度末収蔵作品数 36,508件

平成15年度末デジタル化作品数 36,508件

今後のデジタル化の対応 毎年収集した映画フィルム数をデジタル化予定

- (2) 所蔵映画関係資料についてのデータベース構築のための文字情報のデジタル化を実施。

平成15年度にデジタル化したデータ件数 7,747件(ID付与の作業分を除く)

平成15年度末収蔵資料数 約44,400件(スチル写真及びポスター、撮影台本)

平成15年度末デジタル化資料数 53,886件

今後のデジタル化の対応 新規収蔵資料のデジタル化と既存の資料の遡及登録をともに行う予定

2. ホームページのアクセス件数 (東京国立近代美術館の件数による)

3. デジタル化した情報の公開 なし

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

平成15年度予算で「映画フィルムデジタルアーカイブ化推進事業」が新規に認められた。これに伴い、カナダのシネマテーク・ケベックワーズ(モントリオール)、アメリカの議会図書館映画放送録音物部、国立公文書館特殊メディアサービス部(共にワシントンDC)を視察して、フィルム保存の現況とデジタル化への取組みについての調査と意見交換を行った。また、所蔵映画フィルム及び所蔵映画関係資料の検索システムの予算も計上され、新世代NFCD(映画及び映画関係資料を対象としたデータベース)の開発に着手した。

#### 【見直し又は改善を要する点】

これまでのフィルムセンターにおける映画フィルム等データベース(NFCD)は、管理用のシステムであるため、15年度予算で新規開発を実施した。この新世代NFCDの開発は当初、内部管理用だけではなく、所蔵フィルム情報の公開システム構築までを念頭に入れたものであったが、経費及び時間的な制約等により、公開システムについては平成16年度の継続的な課題となっている。

## (2) - 1 児童生徒を対象とした事業

### 中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

### 実績

#### 1. 小・中・高校生を対象とした「こども映画館」の実施

19回

参加者数 1,293人(平成15年度のみ)

担当した研究員数 2人

#### 2. 相模原分館における小・中学校の児童生徒を対象とした上映会

実施回数 2回(平成14年度実績5回)

参加者数 214人(平成14年度実績 401人)

担当した研究員数 1人

事業内容

・平成16年2月26日、相模原市立由野台中学校3年生(上映作品「学校」)

・平成16年3月23日、相模原市立由野台中学校2年生(上映作品「絵の中のぼくの村」)

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

相模原分館におけるこども向け上映会は、学校からの要請に応じて、相模原市教育委員会を窓口として実施している。市内全域の小・中学校への周知は行われているが、相模原分館近隣の小・中学校からの依頼が顕著である。

#### 【見直し又は改善を要する点】

「こども映画館」については、上映作品も好評で、夏休みの回にはかなりの集客があったが、春休みは好調とは言えない結果となった。今後は、集客を考慮に入れた番組編成や広報、上映開始時間などの実施方法について、保護者や学校関係者等から意見聴取を行うとともに、子どもの生活に適合したスケジュール作り、学校カリキュラムとの連携などを視野に入れるなど、一層の検討をしていく必要がある。

## (2) - 2 講演会等の事業

### 中期計画

(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。

それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

### 実績

#### 1. 座談会

開催日時:平成15年10月12日(日)午後2時45分から

開催場所:有楽町・朝日ホール

講師:ダン・ニッセン(デンマーク映画協会アーカイヴ館長),塩田明彦(映画監督)

テーマ:「聖なる映画作家,カール・ドライヤー」

参加人数:227名

#### 2. シンポジウム

開催日時平成15年12月11日(木)12時30分から、同12日(金)午前11時30分から

開催場所:有楽町・朝日ホール

講師:蓮實重彦(映画評論家)、吉田喜重(映画監督)、山根貞男(映画評論家)他、多数

テーマ:「OZU 2003」

参加人数:1,538人

#### 3. 講演会

開催日時:平成16年2月20日(金)午後5時30分から

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター小ホール

講師:ヨハン・プライス(映画復元コンサルタント,国際フィルム・アーカイヴ連盟テクニカル・コミッション・コンサルタント)

テーマ:「ナイトレート・フィルム復元の原理と実際」

参加人数:151名

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

国内外から専門家を招いて行う国際映画シンポジウムは、平成元年度から実施されているが、これまで世界の映画をめぐる様々な課題を取り上げることで、映画史研究に新しい視点を提供し、また日本のフィルム・アーカイヴ活動に大きな影響を及ぼしてきた。

平成15年度は、上映企画「聖なる映画作家,カール・ドライヤー」の開催にあわせて実施した。これまで「裁かるジャンヌ」「奇跡」といった少数の傑作でのみ日本で知られていたドライヤーの世界を、その活躍していた当時のデンマーク映画界や他の北欧諸国の映画製作の状況を踏まえて解説したニッセン氏の講演は、その多様な作品の傾向の分析とともに優れて新鮮な知見を日本の映画愛好者に与えた。さらに映画監督塩田明彦氏との対談では、ドライヤー作品を通じて映画演出についての原理的な議論がなされ、世界映画史の古典としてのドライヤー作品の高い価値と、変わる事のないテキストとしての豊かさを印象づけた。

また「ヨハン・プライス講演会」は、急遽実施が決定したにもかかわらず、映画関係者をはじめ、昨年度の課題とされていた文化財関係者、映像や写真に関する学会員、デジタル技術者など、映画関係者以外の来館者も多数あった。内容的にも、映画保存の実務的側面を丁寧に解説したものとなり、とりわけ日本でこれから発展が期待される映画復元技術の関係者に好評であった。

#### 【見直し又は改善を要する点】

本事業は、映画保存の動向、映画史的な研究など、年によってテーマが異なるものとなっている。近年では幅広い層の参加者が増加傾向にあり、画像を使った説明が解説の助けとなるとの意見も寄せられている。また、パネリストからも画像を使った講演の希望が出ており、これらに対応していくための投影機材を充実することが必要と考えている。



### (3) - 1 研修の取組

#### 中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

#### 実績

##### 1. 映画製作専門家養成講座

研修期間 4日間

開催場所 東京国立近代美術館フィルムセンター小ホール

参加者数 101人(内修了者数60人)(平成14年度実績115人)

担当した研究員数 2人

##### 事業内容

平成15年度で第7回を数える映画製作専門家養成講座は、平成9年度の第1回から日本映画の黄金時代(1950年代)を築き上げた数々の映画人を講師に迎え、映画をめぐる技と匠を次世代の映画人に継承することを目的として実施されてきた。第3回までは映画作りの部門別に講座を開催してきたが、第4回からは映画芸術に多大な功績を残した人物の業績をたどった。今回は、現在、活躍中の人物を迎えて、講師自らが継承してきたものを探りつつ、受講生が映画製作を学べる場を提供した。

#### 自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある取組み】

平成15年度は、日本大学芸術学部の教授として教鞭をとりつつ、現役の映画編集者としても活躍中の宮澤誠一氏をコーディネーターとして迎え、各日のゲスト講師として招かれた撮影監督とともに「撮影技術-伝承のかたち」というテーマで講義を実施した。今回の講座で招かれた講師は、現在最前線で活躍しているカメラマンばかりであるが、それぞれの映画界入り以来のキャリアの積み方には、伝統ある撮影所に所属する、低予算映画のフリー助手となる、など多様な形があり、現代の日本映画における人材作りのあり方を的確に示したと考える。

脱スタジオ化の進む日本映画の傾向を踏まえながら、撮影技術の伝承の多様なかたちを探るこの講座は、第一線の映画人ならではの自負と技術的経験に支えられた語り口とともに、これから映画製作を目指す受講者に少なからぬインパクトを与え、現代の映像作りが伝統的な映画製作とどのように接し、どのように今後の映画製作に活かせるかを浮き彫りにしたと思われる。とりわけ今回20歳台の若年層の参加が目立ち、講座の趣旨に鑑みてより適切なものになったと考える。

##### 【見直し又は改善を要する点】

平成14年度に「今後の課題」とされていた、低予算化・脱スタジオ化が進む現代の映画製作への対応については、平成15年度のテーマによってある程度カバーできたと考えられるが、引き続き重要なテーマである。今後は、撮影所の使用による大規模予算の映画製作を通して培われた、日本映画の「黄金時代」(1950年代)の人材育成システムなどの流儀を、同講座のカリキュラムで実行上できていない実技部分とあわせて、具体的にどのように組み込むかを検討する必要がある。また、それと関連して、現在映画製作の教育に携わっている各種団体など、外部機関との緊密な連携がますます必要になってゆくものと考えられる。

また平成15年度は、第一線で活躍中の撮影監督を講師としてお招きしたため、講座のプログラムをまとめるのに通常以上の時間と労力を費やしたほか、完全に確定していない段階で受講生への連絡を行わざるを得なかった。今後は講師予定者のスケジュールをより配慮した準備方法を整えたい。

### (3) - 2 大学等との連携

#### 実績

- |                                |
|--------------------------------|
| 1. 博物館実習生の受け入れ                 |
| 受入期間 平成15年7月29日～平成15年8月2日(5日間) |
| 開催場所 フィルムセンター及び相模原分館           |
| 参加者数 12人(平成14年度実績9人)           |
| 担当した研究員数 6人                    |
| 事業内容 講義・館内見学・映画資料整理・課題発表。      |

#### 自己点検評価

- |  |
|--|
| 【良かった点、特色ある取組み】<br>平成15年度は8大学より12名の実習生を受け入れ、フィルムセンターの歴史と運営、フィルム・アーカイヴの理念、各部門の仕事、相模原分館におけるフィルム保存の実際、フィルムの取り扱いなどを講義するとともに、アーカイヴ資料の整理の実習としてスチル写真の整理作業に当たらせた。網羅的な映画の収集・保存・復元を行うフィルム・アーカイヴ活動の重要性も伝えるため、前半は講義を中心とし、その理念への理解を踏まえて実習に移行するようカリキュラムを作成し、またフィルム・アーカイヴの仕事に直結する用語を調べさせる課題も与えた。これにより、実習生に対してフィルム・アーカイヴという理念を知らしめ、日ごろ観客としてしか接することのできない「映画」観とは異なった新鮮な刺激を与えることができたと考える。<br>また前述の映画保存・修復をめぐる講義企画(ヨハン・プライス講演会)に関して、立命館大学と共同で立案・運営を行うことができた点は、新たな取り組みとして評価できる。 |
| 【見直し又は改善を要する点】<br>今後は、実際の映画フィルムそのものに関する分析調査や分類整理など、フィルム・アーカイヴの他の基本業務についても実習で扱いたいと考える。また12名という人数は、現在の受け入れ態勢では最大限の数字であると考え、今後フィルムセンターでの実習の要望が増加した場合は、新しい受け入れ態勢を検討する必要がある。  |

### (3) - 3 ボランティアの活用状況

#### 中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

#### 実績

1. 登録人数

なし

2. 活動内容

なし

3. 今後の取り組み

7階展示室の映画部門専有化に伴う映画の歴史等の解説や、「こども映画館」における上映前トークなどを行うボランティアの導入について検討する。

#### 自己点検評価

美術館及び工芸館での活動状況を踏まえて、7階展示室での解説や「こども映画館」での解説ボランティア等導入の検討を行っていきたいと考えている。フィルムセンターは、大衆芸術である映画(娯楽)を取り扱っているため、本館・工芸館と異なり、一般的な作品の解説ボランティアは馴染み難く、この点を考慮に入れた導入方法を今後検討していきたい。

## (4) 渉外活動

### 中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

### 実績

#### 1. 企業等との連携

##### 共催上映の実施

- ・「短篇映像メディアに見る現代日本」(社団法人映像文化製作者連盟)
  - ・「日本におけるトルコ年記念事業 トルコ映画の現在」(駐日トルコ大使館)
  - ・「聖なる映画作家, カール・ドライヤー」(財団法人国際文化交流推進協会、朝日新聞社)
  - ・「清水宏 生誕100年」(NPO法人東京フィルメックス実行委員会)
  - ・「小津安二郎生誕100年記念 小津安二郎の藝術」(松竹株式会社)
- 「こども映画館」を実施するに当たり、企業(株式会社IMAGICA)の協力により記念品の提供を行った。

##### 講演会等の実施

- ・「小津安二郎シンポジウム」(朝日新聞社、松竹株式会社、国際交流基金)
- ・「ヨハン・プライス講演会」(立命館大学、鳥取県三朝町)

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

平成15年度は、上映企画の実施に関して、これまでになく外部との連携を積極的に模索・実行した年であった。映画業界団体と連携した「短篇映像メディアに見る現代日本」、文化庁の協力を得て在日大使館と組んだ「トルコ映画の現在」、新聞社などと共催した「聖なる映画作家, カール・ドライヤー」、映画祭との部分共催となった「生誕100年 清水宏」、民間の映画会社と組んだ「小津安二郎の藝術」と、その共同開催の形態もさまざまである。フィルムセンターの豊富な映画コレクションと優れた上映施設、企画運営のノウハウを活かしつつ、今後も各方面との共同開催を探ってゆきたい。

#### 【見直し又は改善を要する点】

事業運営、広報、サービスを充実するため、企画上映及び展覧会への新聞社、企業、メセナ財団の協力や支援を得る方策の検討を行う必要がある。

## 5. その他の入館者サービス

### 中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

### 実績

- 1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等 (1)-1
  - 障害者トイレ 1個所(1階1個所)
  - 障害者エレベータ 2基
  - 段差解消(スロープ) 1個所(正面玄関)
  - 貸出用車椅子 2台(1階)
  - 自動ドア 1箇所(正面玄関)
  - 展示室内の映像モニター鑑賞用に椅子を配置
- 2. 観覧環境の充実 (1)-2、(1)-4  
7階展示室での映像モニターの導入により、わかりやすい展示環境を整備した。
- 3. 夜間開館等の実施状況 (1)-3
  - (1) 上映開始時間の変更  
平成14年度に引き続き、平日夜の回の上映開始時間を30分繰り下げ、午後7時からとした。
  - (3) 入場者料金の取り組み
    - ア. 小中学生の入場料の低廉化の一環として、展示室の小中学生料金を無料とした。
    - イ. 展示室の学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金を下げるにより、料金の低廉化を図った。
    - ウ. 65歳以上の入館者に対する観覧料金は学生料金を適用した。
    - エ. 上映会観覧当日に限り、展示室観覧料は団体料金を適用した。
  - (4) その他の入館者サービス
    - ア. 館内での案内情報の充実
      - ・1階受付カウンターで館内の案内情報の提供を行っている。
      - ・1階、2階、4階及び7階の来館者が利用できるフロアにパンフレット台を設置し、上映プログラムや展覧会等のチラシを配布した。
    - イ. 休憩スペースの充実  
7階展示ロビーに開設した「映画の広場」を来館者の休憩場所とした。
- 4. アンケート調査(1)-3
  - 調査期間 企画上映アンケート調査の際に実施
  - 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
  - アンケート回収数 1254件(未回答を含む)
  - アンケート結果 ・良い 83.90%(928件)・普通 14.38%(159件)・悪い 1.72%(19件)
- 5. 一般入館者等の要望の反映 (2)  
開場前に並んでいる入場者の便宜を図るため、2階エレベータホールへ18席の椅子及び上映会場入口へ通じる階段部の踊り場へ椅子を設置した。
- 6. レストラン・ミュージアムショップの充実 (3)  
レストランは火曜日から金曜日は午前10時30分から午後8時30分、土曜日及び日曜日は午前10時30分から午後6時まで営業し、入館者へのサービスに努めた。  
フィルムセンターでは、施設規模の面からミュージアムショップ等のスペース確保が難しいが、会場入口の受付において出

出版物等の販売を行い、来館者へのサービスに努めた。

### 自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある取組み】

健康増進法(平成15年5月1日施行)により、館内を禁煙とした。これに伴い、大ホールのホワイエに設置されていた喫煙場所を撤去し、屋上庭園を喫煙場所とした。アンケート調査では若干の不便になったとの声も寄せられたが、大部分は利用しやすくなったとの意見であった。今後ともアンケート調査等により、来館者のニーズを把握・分析し、上映開始時間の見直しや展示室、図書室その他の利用者に対するきめ細かいサービスを実施していきたい。

これまで展示室及び企画上映の会場では、フィルムセンターの刊行物のみを販売していたが、試行的に一般書店では取り扱われていない映画関連図書の委託販売を行い、好評を博した。

#### 【見直し又は改善を要する点】

フィルムセンター内にレストランはあるが、一つの企画上映をほぼ全作品にわたって鑑賞するリピーターが多い、フィルムセンターの観覧者は、金額面からほとんどレストランを使用していない状況である。利用しやすい自動販売機等の設置について要望が寄せられており、今後、自動販売機等の設置を検討する。

また、リピーターが多いという特性から、回数券の導入や、割引を受けられる会員制度についての要望が寄せられている。これについても、観覧者サービスの観点と収入のバランスを考えながら、今後検討していく必要がある。

開かれた施設を目指し、できるだけ多くの来館者が満足できる入館者サービスを実施するには、現状の施設、人員や経費の面で困難が伴うが、今後も入館者の要請に応えられるようきめ細かいサービスの確保、提供に努めていくことは重要と考える。